

# 趣味探訪

## 音楽

山田 忠 男

(大学工学部教授  
生命の科学、生物学実験)



——きょうは先生には、趣味とくに音楽の話しをうかがいたいと思うのですが、先生のお宅はご夫婦そろって音楽がご堪能で、また、皆様が音楽をなさると聞いておりますが……。

山田 「好きこそものの上手なれ」とか「下手の横好き」とかいますが、私は昔から、下手の横吹きと称しまして、小さいときから音楽が好きだったんです。それで、うちの子供も、バッハの「G線上のアリア」などが子守歌になるという調子で、何かことあることに皆で集まって音楽を楽しむことができるというのがとりえですね。

——始めは笛を吹いていらっしやったんですか。

山田 昔のことですから、ピアノなんて小学校ぐらいにしかなかったのですが、幸いにして家にオルガンがあって、また師はバイオリンを弾いていたんですが、私は中学校から

笛、それもフルートが好きだったんです。この一本の笛を通じて、いろんな意味で私の生活も充実してきたと思うんです。そういうことで、いまでも笛が好きで好きで……。

——ひじょうにたくさんさんのフルートをお持ちですね。

山田 現在のような形のフルートのほかに、インド、蒙古、ユーゴー、スコットランド、ペルーなどのもあり、計百本以上にはなりません。集めようと思ったわけじゃないんですが、いつの間にか、たまってしまいました……。

——先生は、京都大学にいらっしやった当時朝比奈先生のを継いで、オーケストラの指揮をやられるようになったということですが……。

山田 たえばドイツのフレデリック大王もそうなんです、笛吹きで楽団を統率して合奏をするという形がヨーロッパでは多かった。私の音楽の先生である、エムマニュエル・メッテルという先生もフルートを吹いた方なんです。そういう偉い人とは違って、私の場合、戦争中、人が少なくなるにつれて、心ならずも指揮者にされたというわけなんで

す。

——先生の場合は、音楽を通して多くの知己、友人を得られたと思うんですが、音楽と友人というものの間には、ひじょうに密接な関係があるということですね。

山田 まったくそのとおりで、国内でも国外でも、フルートやオーケストラの仲間であるというおかげで、精神生活にどれほどプラス



フルートとハープの合奏を楽しまれるご夫妻

になったかわかりません。

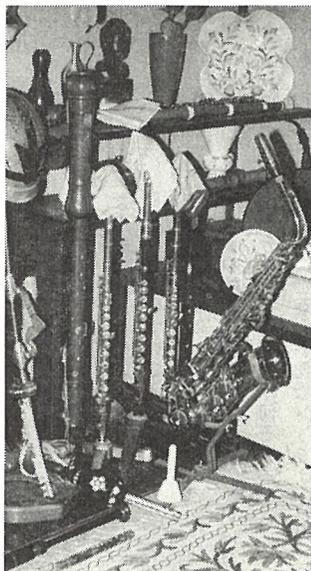
同志社へ来る前は、「山田もいい男だけれど、おいしいことに音楽をやるからどうも……」ということをよくいわれたんですが、同志社へ来ると当時の総長、湯浅八郎先生が、「音楽がで

きるからいいです

ね」というわけで、本当に広い野原に出たような気がしまして、同志社の伝統というものはすばらしいなと思いました。それから、長らく京都府の教育委員を兼ねていて、ここでもいろいろ助けになったのが音楽なんです。

——音楽とか芸術を大切にするということは、教育をする上でひじょうに大事なことでしょうね。

山田 中国の古典、礼記には、「楽は天地の和なり」とか、「すべて音は人心より生ずる」などとあって、孔子の頃は教育の基本になっていました。西洋だって、古代ギリシャのピタゴラスなど、音楽の意義を高く評価したもの



珍らしい管楽器の一部

です。新島先生もフルートをお持ちだったし……。

——人間は、生活の中に音楽がなければ生きてゆけなかったといっても過言じゃないですね。

山田 ハンス・フォン・ビューローというドイツの指揮者が「始めにリズムありき」といっていますが、なにごともしリズムが基本ですね、結局、音楽も、ダンスでもそうですし、生活でもそうです。だから、「リズム」という意味で多分に音楽が重なってまいりますね。

——先生はみごとにハープをお持ちですが、これはいつごろの時代から使われたものですか。

山田 弦楽器ではこういうハープという形が一番古いです。人類学でいうならば、ホモ・サピエンスが出現して間もなくハープができて、これからいろいろな音楽が派生してくるんです。

——ハープを弾く人は少ないと聞きますが。

山田 この型のハープは、京都に一台あるだけだったんですが、いまは、市の交響楽団にアメリカから寄付してもらったのが一台、それから、ハープを専門に勉強を始めた若い女性が一人出ました。現在京都にはハープリストが三人あるわけです。

——学校でも、もっと音楽が盛んになって、豊かな教育がされればいいと思うんですが。

山田 一般教育科目にぜひ音楽を入れてほしいという声があるんですが、そうあってほしいと思いますね。

——どうもありがとうございます。

\*

\*

\*

## 民 芸



### 西 邨 辰 三 郎

(香里中高教諭  
社会、音楽)

——西邨先生が民芸を始められてから何年ぐらいたちますか。

西邨 そうですね。早いもので、もうかれこれ四〇年ぐらいになりますかね。僕は元來歌

が好きだったので、同志社大学時代に、柳葉子先生のご指導で、音楽を始めました。そんなことから、ご主人の柳宗悦先生とも親しい間柄となりました。柳先生が京都の神樂岡から下鴨に転居された当時、よく先生のお宅を訪問しましたが、いろんな種類の民芸品が集められていて、それらがとても美しく、不思議なほど私の心を打ちました。またそれらが先生の暮しの中にいきいきと用いられている有様を見ると、いつそうのすばらしさを感じました。それから、まさにそれから私の物の見方が変わってきたのです。

——あの時は民芸品を下手物といっていましたね。

西邨 そうですね。ご存知のように、工芸品を上手、下手に分け、下手物というのは、不揃いのもの、用途に忠実な並みのものという意味でした。柳先生は、着飾ってとりすまして上手のものより、毎日われわれの生活の用具として働いている下手物、すなわち健康で、素朴で、人によく奉仕するようなものの中に真の美を発見され、これらを賞ばれました。そうして「美とは何ぞや」、ということに、単に抽象的な概念からではなく、じかに

物に即して私どもに教えて下さいました。

——先生のコレクションは、非常に多岐にわたっていますが、また棟方志功さんのものなどもずいぶんたくさんお持ちのようですね……。

西邨 これも不思議な縁なのです。まあ、棟方さんのすばらしさというのは、最初柳先生によって発見されたんだけど、柳先生の同志である河井寛次郎先生や浜田庄司先生たちも、棟方さんの自由奔放な童子わづなのような性格を愛し、その作品を非常に愛好されました。彼は昭和十五・六年から六、七年にかけて、とくに河井さんに傾倒し、先生から多くを学んだわけです。ちょうどそのころ、僕の家は河井先生の家からも近く、すでに村岡景夫さんなどを通じて河井先生とは昵懇でいになっておった関係から、「西邨君が本町で民芸の収集もしているし、民芸の仕事もやりかけておるので、棟方も帰りに寄れ」ということだったんでしょうね、よく棟方氏が僕の家に来て、わいわいしゃべり、座興に墨絵を画いたり、試作の版画をくれたりしました。いま僕が持っているのは主として、その時代のものです。もちろん展覧会で買ったものもあります

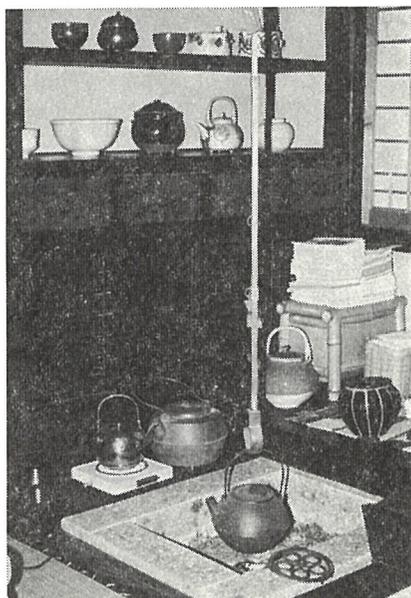
が……。

——民芸運動についてどのようにお考えですか。

西邨 柳先生の民芸運動は、その宗教性に大きな意味があるんですが、このことは現在あまり知られていません。これは非常に残念なことであります。また河井先生は、ものの美しさはどうすればわかるか、という質問に答えて、「拝めばわかるんだ」といいました。そういう意味からも、民芸運動というのは、同志社にふさわしい、また望ましい美の運動ということができると思っています。本当のものの美しさを知るために、同志社では民芸というものに、もっともっと関心を寄せてもらいたいですね。

——同志社も適当な場所に、大博物館を作って、校友や同窓、それに父兄が寄付ないしはその所持品を貸与して、展覧するというようなことをすればよいと思うのですが……。

西邨 大賛成です。そのことは僕が前から言



民芸色豊かな部屋のたたずまい

っていたことです。その中には民芸の美しさを展示するような展観場を作り、大いに建学の精神を発揮すればよいと思っています。

民芸というのは、よく趣味品とか骨董品と間違いやすく、同時に「過去のもの」だというふうにいるこまれている感じが、これも非常に残念なことで、将来にこそこの美しさを社会の各方面におくり込まねば、社会は豊かになりません。

——民芸とは、一種の趣味であるとか、農芸美術とかいわれていることについてのお考えは？



数々の民芸品が整然と並べられている

西郷 これは単なる懐古的な趣味ではないことを、またいわゆる農民芸術のような甘いものではないことを銘記していただきたいと思えます。

——先生は民芸を愛好され、また民芸運動をさらに正しい軌道にのせるようと、新しい

民芸運動をおこそうとお考えになっているわけですね。

西郷 そうです。とくに宗教教育の面において、情操教育の面において、同志社には必要欠くべからざる教育上の問題であること、柳先生の教えに従って、今後も各地の民芸協団

が正しく美しい日用品を生産することを念じてやまないものです。

若い世代、とくに学生生徒たちに、正しい「美しさ」とは、どういうところからくるものかということ、世界的視野からもう一度反省し、また彼らと共に研究したいと思っております。

\* \* \*



以上をもってかつての啓真館と土蔵について現在までわかったことを誌してその記念とすることにする。なお記念の瓦等は社史史料室にて保管している。取急ぎ一文にしたので調査不十分、事実の誤りが気になるどころ、大方のご教示を待たざるを得ない次第である。

(社史史料編集所職員)